

真生

第五卷 第十月號

○私達は一時の喜びを喜ぶよりも更に永遠の喜びを喜ぶ、一時の樂しみを樂しむよりも更に永遠の樂しみを樂しむことが、眞に吾人の要求ではないか。

○然に吾人は反つて、一時の喜びも之を求めて之を得ず、一時の樂しみを求むるが爲め、反つて失つてゐるではないか。之眞實の道に生きないが爲である。然に眞實の道とは何であらうか。

○それは自分と一切とを一體に見て、喜びを喜ぼうとし、樂しみを樂しまうとするならばそこには天地の大道に生きるより外に道なきものなし。

○凡そ喜びとか樂しみとか、さうしたもののは目的そのものとし、喜びを得らるゝものでなく、目的そのものを果たすとこころに眞の故に私共は單なる喜びを喜び、樂しみを樂しむといふ如きことを止めて、眞に生きべき樂しみをなす時に、

○初め限りなき喜びと限りなき樂しみをなす時に、

○然ば眞に生きべき道とは何であらうか、そしてまた眞になすべきものは何であらうか、これを實に私共の求むべきものであつて、樂しむべきものである。

○夫はたゞ、自ら信ずる天地の大道に自らを獻けて之に生きるより外はない。

○世に永生の道といふも要するにこの天地の大道と自ら合するの生活である。價値の生活といふも自ら此の大自然の力に生くる事である。

○然は大自然とは何であるか、それは宇宙そのものの働きのあり、現はれである。而て、それこそ、一切生命であり一切の力である。

○故に私共が眞に一生を樂しみ、眞に永劫に生きるといふ事は此の大自然の力に自らを生かし、此の生命に自らを喜ばしむるといふ事である。(念)

天公正十四年八月廿三日
 天公正十四年八月廿三日
 天公正十四年八月廿三日

▲眞に生きるが爲めの生

◆私達は名を賣りたいばかりに炭々としてゐます。
◆そして人目につくやうな事をせなければ成功でないやうに考へて居ります。それで人の氣の附かぬやうな方面へツと潜つて、素晴らしい事を仕出來かし、衆人をアツと云はし、それと同時にポロイ儲けをしたいものだ、と始終鵜の目鷹の目である。

◆けれど成功とは何が成功でせう。
◆深山の奥で獨り靜かに紅葉してゐる老木にも成功の尊さはないのでせうか、誰が褒めて呉れなくとも、誰が顧みて呉れなくとも、天地は昭々として此一人者をあがめて居ります、いや色にも香にも出なくて木蔭に黙り込んでゐる名もない草、花に至るまで、皆宇宙の第一人者です。

◆人目に立つ、立たぬが問題でなく、本當に如來のみ力に生かされ、その如來さまの前に至分自己を供養貢獻して餘すところのない者こそ、眞に無二の成功者であります。

◆世間からの人氣受ばかりを當てにして、糸の切れた風船玉のやうに、フラー、腰の浮き上がつてゐるのは、寧ろ哀れむべきであります。

◆ドツシリと佛の大地に尻を下して、人間對手でなく、佛對手に本當の仕事が出來るやうになつたのが信仰であります。

◆他人から賞められるといふよりも、「佛から」ほめられる人、「自分を自分で」ほめられる人になりたいたいものだと思ひます。(尅)

目次

- ◆如來のみの心で洗はる、
尅 子
- ◆我等は如何は生くべきか
土屋 觀道
- ◆AとBとの對話
土屋 觀道

如來の心で洗はる

◎口では信仰がどうの、宗教がどうのといふてゐるが、本當に信仰になつてゐますか。

◎皆な信仰や宗教を前に置いて其評定に終つてゐる。信仰とは斯ういふ心理状態である、宗教生活とは斯うならねばならぬなどと、註釋を附けてゐる丈けて信仰そのモノとなつて居らぬ、恰度硝子壘の中へ信仰を入れて見てゐるやうな氣がします。

◎もうそういふ間ぬるい事をしてゐる暖がありません、一氣に信仰そのものとなり切らなくて居れませぬ、それを思ふと法然上人が「たゞ一向に念佛すべし」念佛申す外に別の仔細候らはず」と側目も觸らず一行に徹して居られた御心持が尊く窺はれます。

◎念佛するごころに念佛そのものとならして戴ける。自分が念佛になる氣がなくとも念佛の方へ攝さめ取られる、そして自然に念佛を行じさせられます。

◎此のお念佛の中から遣らされる一舉一動だから何のこだはりもない。それを腹の中に「信仰」といふ或る度量を呑み込んでゐて、一々その度量に當て箝めて仕事をするのだと思ふと違ふ、そんな「信仰」といふ度量まで吐き出して、本當の空ッぽ五月の鯉の吹き流しのやうに如來のみ心で洗はるゝことが信仰である。

◎剛張つたところが一つも無く、眞に内も外も御慈悲に充され本願の儘に押されてゆくといふ事より外に信仰はない。

◎覺ゆる事でも言ふ事でも、爲す事でもなく、眞に成る事である。彼處でなる、何時なるのでもなく、今此處で其如理の實相そのものとなることである、六つかしいやうでななんでもない、何でもなくて難かしい事である。(尅)

吾等は如何に生くべきか

土 屋 觀 道

吾人は生れてから死ぬるまで色々の生活をしているが一體如何なる生活を爲すことが本當の人生であるであらうか、吾人は人生の生活に於て最も高き價値の生活に生きたいものである。

然るに如何なる生活が眞に價値ある人生であらうか、そこには吾人の生活に對して價値的批判がなくはならぬ。然らば價値とは一體何であるか、それは所謂俗に生涯と云ふことである。乍然その生涯と云ふことも結局何が生涯であるであらうか。俗に價値とは値打ちと云ふことである。従て吾人の生活に必要なものと不必要なものがあるときは不必要なものをネウチ無いものとなし、必要なものネウチあるものとする。乍然吾人の生活そのものに就て如何なる生活が必要であり、必要でないかと云ふことに至つてはさう一概に之を定めることはできないものである。

茲に生活そのものに就て價値ある生活と價値なき生活とを區別しやうとするならばそこに價値を批判すべき一つの標準と云ふものが無くてはならぬ。然に若し吾人に於て此の標準が無いならば凡そ吾人の生活は何を以て正しいとすることが出来るであらう。若之に反して生活そのものが目的であるならば吾人の生活は如何なる生活の方法によるもよいと云ふこととなつてしまふであらう。

最も世には生きることのみを以て社會生活の標準となし、或は人と人との上に、或は人と社會との上に、或は人と國家、國家と國家、國家と社會、社會と社會、若は社會と個人と云ふやうに相互に圓滿調和發展を中心として考へて行く所の社會生活を目的とするものもないではない。乍然かゝる生活が人生の意義であつて、今日の社會理想、若しくは倫理道德の目的であるのならば、それは唯吾人が單に生存して行くと云ふ平和の生活に過ぎぬであらう。従て、そこには何等生存の意義は無いことになる。換言れば、所謂吾人は何の爲めに生きているのであるか、生存の眞意義如何と云ふことに對しては未だ何等の回答も與へられないのである。

尤も之を人類の生活上に眺むれば人生の眞意義について眞面目に反省するに到つたことは或は嚴密な意味に於て極めて最近なことであり、今以つて眞に生存の意義を明かに指示し得るものが幾人であらう。世間の多くは今も尙昔の如く、徒に生きんが爲に生きてゐるのに過ぎずして、自ら生存の眞意義を解し、自ら生存の價値に生きてゐるものは甚だ以て尠いやうである。

然は價値とは何であるか、生存の眞意義とは何であらうか、吾人は先づ此の一點から明かにしてか、らねばならぬ。

價値とは心理學的に云ふならば其の人の心の要求を満すところのものであらねばならぬ。従て生存の意義が其の人の價値的要求を満す所のものであらねばならぬことはもとよりである。然に人生の要求には色々の要求があり、而も其の要求の程度内容を一々に反省すれば其の人の立場々々によつて、或は個性の發達、民族の相違、男女の區別、貴賤貧富の相違、或は其の人の利害得失の如何によつて、之に對

する要求の感情も相違し、亦變遷する場合があらう。従てかゝる相違がある限り甲の要求必ずしも乙の要求と一ならず、又丙の場合必ずしも丁の場合と同一でない。然はかゝる際に於て、吾人は何を標準として價値の批判をなすであらうか。若ししたゞ其の人各人の心の要求を満たすものを以て其の人に於ける價値とするならば結局問題は以上の如くなるの外はない。さればと云つて吾人は此の外に吾人の價値的標準を何に求むることができらう。例へば甲は赤を要求し、乙は青を要求する場合、甲は赤に於て價値ありとし、青に於て價値なしとし、乙は青に於て價値ありとし赤に於て價値なしとするに相違ない。然に此の時、この甲乙の二人に於て何れが眞であり偽りであらうか、恐くは之を第三者より此の二人の要求を是非することは出来ぬであらう。而て之は餘りに卑近な一例に過ぎぬことではあるが、此の甲乙の二人に於て、若し之を其の人の食物に就て考へ、或は其の人の生活に就いて考へ、或は其の人の行爲、道徳、藝術に就て考へ來る時、吾人は此の二者に於て何れを眞なりとし、何れを價値ありと定むべきかを判することが出来ぬであらう。即ち甲は柿や梨が好きで酒は大の嫌いと云ふに、乙は之に反して酒が大好きで柿や梨などは見るのも嫌と云ふこともある。又甲は静かな所が好きで賑な所が嫌なのに、乙は反て賑な所が好きで静な所が大嫌いと云ふこともない。一は甲は働くのが嫌なのに乙は働くより外に望みがないと云ふこともないとも云へぬ。其他甲は資本主義を嫌い、乙は社會主義を忌むで各相反目すると云ふ場合凡そ吾人は何れを以て意義ありとし價値ありとするであらうか。ともすれば人は各自己の欲する所を以て意義あり價値ありとなすがつねであれば、遂には各それに向つて自己の欲求を充たすべく活動するに相違ない。否現に今日の實際生活が其の意識すると否とに關らず結局は各人の

最も強き欲求に向つて動いているのである。して見れば各人に各自の欲する所、即ちその人自らの價値なりとする所に向ふて各動いていると云ふことになるのである。

二

乍然、人類の生活はしかく簡短なものでなく、時に自ら是なりとしたことが後には反つて非なりと感じ、初めには非なりと思つたものが後には反て是なりと思はれるものがあり。或は二つの場合、甲につけば乙が悪く、乙につけば甲が悪いと云ふことがあり、さればと云つて、二つにつけば申分ないがそれは實際が許さぬとか、或は自分を何うすることが本當の道であるかそれさへ判らない時がないとも限らぬこともある。否現に人生の一生我は何を爲すべきかと深く尋求し來るとき、眞に之を爲すべしと自ら答へ得るものが幾人であらう。而して今日吾人の價値ありとして要求するものがはたして將來にも價値ありとして求むべきものでありまた永久に要求せらる可きものであるかどうか、靜に自己の一生を反し省來るとき、轉々疑なき能はずであらう。世にはたゞ眞劍なれ、精進なれ、何事にも懸命でやれと云ふ人があつた。乍然、自分が何を爲すべきが未だ判明せないものに對して、何うして眞劍であり得やう、精進ならんとするも精進することが能はぬではないか。まじめにならうとしてもまじめになれぬのである。尤も見やうでは如何なる場合にも眞劍であり精進であり努力であると云ふことは結構なことである。乍然、吾人は何に向つて眞劍で精進であり努力であるべきか、今少しく吾人の生活の上に於て具體的な云ひ力はないであらうか。茲に於て吾人は人類の生活を反省して、三種生活を發見した。

第一には動物的生活である。之は主として生活の中心が多く動物と同じ形式の上に營まれる生活で

ある。そこには何等の價值的批判もなく、たゞ生きんが爲めの肉慾の生活である。之に自らを生きんが爲めの自己保存と自己の子孫を生存させん爲めの種族保存の生活がある。此の二者は全くすべての動物に共通な點であつて自分にはそれさへも自覺せず寧ろ無意識の中にも欲求せられた先天的動物の本能であつて、之を充たすが爲めの生活である。即ち直接五感の肉慾的快樂を中心とした生活であつて食慾と性慾の外には何も無い生活である。而て之が爲めに金錢も名譽も地位も顧みるところでなく、一切はたゞ之を以つて最高至樂の生活とする。

第二には經濟中心の生活である。之は人生の一生をたゞ經濟の爲めのみ的人生として、一切を生きやうとする生活である。食ふものも食はず、飲むものも飲まず其の他の生活は皆悉く此の財慾の爲め的人生である。されば人生の幸不福、或は成功不成功皆一に此の金錢の有無、財産の多寡によつて定まるとなし、一生を擧げて此の問題に没頭したる生活である。

第三には宇宙的精神の生活である。之は許より精神のみの生活ではないけれども、主として理想を心とし、肉慾の爲めの我にあらすして理想の爲めの人生であり、財の爲めの生活にあらすして真我の爲めの人生である。

この三種の生活に於て吾人は何れに生くべか、眞の理想から云ふならば此の三者の中其の生活の中心を何れにおくが至當であらう。

吾人に經濟の必要なことはもとよりである。乍然如何に考へても吾人の生存が經濟の爲めの人生とはどうしても考へることが出来ないのである。従て、經濟の經濟として價値ある所以は吾人の生活を助け、

社會の文化に効驗する意味に於て始めて其の意義が認められるのであつて、若しも人類の生活を妨げ、社會文化の發達を毀損するものならばそれは己に經濟的價値的範圍を越えたものと云はねばならぬ。然に吾人は此の意味に於て果して價値的經濟を充分反省してゐるであらうか。ともすれば多くの現代の人々は反て經濟に捕はれて、日夜其の爲めの人生であるかの如き有様である。最も經濟の問題は一面人類生活の基本であれば最も重大なる社會問題の一つであつて、或は家庭生活の上には或は國家政策の上に、極めて重要な地位にあることは吾人が特に考慮せなければならぬことで、又今後益々經濟の完全なる發達を期すべきことも充分に之を認むるものではあるが、乍然如何にそれが人類の生活に必要であるとは云へ、それを以つて、經濟の範圍が人生の上に越ゆるべきことは到底、許すべきことではない。従て又少しく人生の本義に目酷めたものならば到底、堪得る所でない。然らば吾人の生存は經濟の爲めの人生でないことは明かである。

三

之について或人は云ふかも知れぬ。かくの如きは現代人の入るゝ所でない。何となれば如何に經濟に就て其の價値的範圍を述ぶるとも實際現代の濟經的要求は更にそれよりも遙に強いものである。而も如何なる人々も此の經濟慾求を離れて此の世に生活することができないとすれば之に定限を加へることは恐らく困難なことである。何となれば今日社會の經濟状態は到底そんな説明に耳を貸すべき餘裕があり得ないからである。乍然かゝる議論の云ひ方は未だ人生の眞意義を深く反省しない所から來た誤りである。世には乞食の如き赤貧を以て自ら甘じ得ているものもある限り、世は必ずしも金錢のみの人生ではないのである。従て吾人の經濟的要求は其の人の自覺程度に於て自ら定限し得らるゝものである。而も自ら人生の意義を反省し、經濟的價値的範圍を自覺し來る時誰か無限の經濟を要求するものがあり得やう。之主として未だ經濟的價値的範圍を知らざるによると云ふべきである。今日の經濟は主として個人經濟

の上に發達した結果、未だ個人の要求が價値的生活に目醒めないもので、其の價値の範圍を越えて、反て自己の生活を妨げ、社會の文化を毀けてゐるものが多いのである。之に反して若し吾人が經濟的價値的範圍を自覺して、眞の人生に生きたならば吾人の今日は確に一大變化を來すであらう。殊に此のことが今日の主なる實業家に於て現はれたとしたならば社會の文化は更に急速の展開を來たすであらう。又之が下級社會の貧民の間に自覺せられても之に對する生活の變化は實に想像を絶した事柄である。更に之を社會國家の生活の標準に置くとしても此の經濟的價値的範圍を自覺することは社會進展の上からも實に重大なる地位をなすものである。

次に來るは肉慾生活の反省であるが此の問題も亦之を前者に比ぶれば可なりな重大な問題である。乍然唯單に生活の爲めの生活が自己生存の眞意義であらうか、或る人は云ふ。衣食の爲めの生存であるか生存のための衣食であるか。とまさか如何に考へても衣食の爲めの人生などと考へられることではない。乍然人は衣食なくしては生存することができない爲めに、生存せんが爲めに衣食するのであるが、其の衣食すると云ふことが困難な爲めに先づ生るが爲に没頭しやうとする次第であつて、一見それが衣食の爲めの生存かのやうに見ゆるのである。乍然今一步を進めて、然ば衣食せんが爲めの生存にあらずして生存せんが爲めの衣食であるならば生存そのものは一體何の爲めの生存であるか。更に考究の必要を感ずる次第である。然、吾人の身心關係は常に相互的と働いて、或時は心の要求に従つて身が働き、或る時は身の要求に従つて心が働く、乍然吾人の心の働きは單に身の爲めの要求ばかりでなく、心の爲めの要求に働くこともないではない。否、多くの動物の生活に於てこそ、主として肉慾の生活に心を働かし、自己保存の爲めにとて、日夜その爲めに働くといふ事實もあるが、更に吾人の成熟期に至つては性慾の衝動に吾が身を忘るゝこともある。更に性慾の對象に異性を求め、そこに戀愛の對象を見出すに至つては更に無上の満足を感じざるを覺ゆるであらう。此の外親子の愛情の如き更に心情の深いものがある。

其の他朋友同胞の親しき心の關係に於て互に相愛し相結ぶ點のいと懐しいことに至つては寧ろ肉慾を越えたる人生の喜びがある。乍然翻つてきてそれが人生々活に於て畢竟何を意味するか。世は悉く無常であり、一切は悉く空に歸するではないか、愛別離苦の人生は死を以つて一切が示されてゐる。吾人はここに人間の有限的壽命が五十年か百年を待たずして見ゆるのである。換言、各人は必ず一度死なねばならぬ。然り此の死と云ふ一つの事實、吾人は之を通して人生々存の意義を見なければならぬ。而て吾人はそこに始めて人生の尊嚴なるあるものを見るのである。而て、近代の一大發見は自己の發見であり、自己の死である。生存の意義果して何れにありや、眞實の我とは何であらうか。宇宙と自己との關係は如何、そこに自己そのものを見つむる人生の眞意義がある。

換言、吾人の要求は單なる有限の人生を以ては満足することができぬのであつて、人生の一生を單なる一生の一生と見ずして永遠の中の一生と見たいのである。吾人は自己の生命を有限と認むることができなくて、何者かそれ以上の生命を發見しなければ安心ならない心の要求がある。即ち不死の生命を欲求する。此の點に對しては私は己に先月の眞生誌に於て「私の生命觀」と題して一應その信する所を述べて置いたが、自己の一生は單なる一生の一生ではなくして、宇宙と共なる永遠の中の一生であることを述べたのである。自己は天地と一なるもの宇宙の外に萬象なく、萬象の外に我はない、されば吾人は天地の生命と一なるもの、宇宙と共に無限なるものである。乍然この自覺は人類進化の一大發展であつて、人類有限の觀念から無限向上への轉入である。夫婦親子の關係も、人類同朋の信念も此の永劫不滅の自覺に至つて始めて眞實の意義を見ることができるのである。

四

乍然、吾人の生存は宇宙と共に不滅であると云ふことが生存の意義を爲すものではない。それはたゞ存在そのものについての説であつて、いはゞ生命實在の問題に過ぎない。從て不死の自覺は死を恐れな

い慰安となり、永劫に生きる限りなき喜びとはなるが、不滅そのものが何も價値の生活ではない。然は生存の價値とは何であるか、それは生ける者の働きの價値であらねばならぬ。即ち吾人の生存の自覺は更に進んで此の土に出生した眞の尊さを發見すると共に其の發見せられた尊き生活を自己の上 眞に現はすと云ふことであらねばならぬ。

然は吾人が此の土に出現して來たといふことは如何なる意味をもつのであるか、其の眞生の意義は何であらうか。そこに吾人は始めて生存の眞意義を自覺するに至るであらう。

茲に於て吾人は再び宇宙と人生との關係を考察せなければならぬ。宇宙は宏大にして無邊である。乍然宇宙無邊なりと雖も、吾人を離れて宇宙は別に存在するものではなく、吾人は宇宙の一員である。而て宇宙の生命と吾人の生命と別ではない、宇宙の生命は吾人の生命である。云はゞ吾人は吾人以外の一と相關してゐると共に萬象はまた宇宙的には一體である。従つて吾人の身心の本源と萬象の本源とは別物でないのである。然に、宇宙には無限の力と法則と恵みとがあつて、一切の上に及んでゐる。此の力と法則と恵みとの根源を吾人は宇宙の生命とし、或は人格的に名づけて神とし、佛とするのである。一切萬有の生命であり、一切現象の根源である、而も之を佛として人格的に見ることは一切萬有の本源は靈肉一體の絶對であり、主客不二の當體であるが故に、宇宙一切の生命であり、根源であり、中心であるが故に之を名づけて如來とする。所謂萬法一如の本源であり、宇宙大靈體そのものである。されば一切の萬法之より生ぜざるはなく、又此の力と恵みとに依らざるはない。天地位し、萬物育するは此の力により、此の則によるのである。而も内には萬有の力となり、外には萬有發展の恵みと輝く。宇宙の萬象一としてこの力と法則と恵みとに依らざるものはない。

茲に一切の萬有は各々其の地位に於て宇宙生命の發現と共に各自時處位の本分を持つことになる。故に一切の萬有は自ら宇宙生命の現はれであることを知り、宇宙の力と法則と恵みとの中に生長して一切

を宇宙の愛護に任かすと共に、各自は各自の本分を自覺して、宇宙の完成に自らを活かすべきである。而て其の自己を活かすの方法は要するに宇宙の發展を自己の發展として、永劫に活動すると云ふことにある。換言、萬有と共に全一の平和と向上とに全力を盡すに外ならぬ。吾人の此の土に生れた生存の意義は要するに此の理想實現の爲めであり、夫婦の關係も親子の情愛も要するに此の理想實現の爲めである。否單に人類の生存が是の爲めの出現であるばかりでなく、一切の宇宙萬有の現象は皆悉く此の理想實現の爲めであると云ふ可きである。

五

然ば宇宙の理想とは何であるかそれは宇宙の眞善美聖の完成である。此の意味に於て宇宙は未だ完全のものでない。乍然今現に宇宙は此の完成に向つて活動しつゝありと見るべきである。而て此の理想を自ら自覺して又更に一切に自覺せしめんとするものが即ち佛敎で云ふ所の佛陀である。即ち宇宙の理想を我が理想として全身の活動に自ら立てる先覺である。此の心を佛心と云い此の心を佛性と云ふ、其の名異なりと雖もそれは體用の相違に過ぎない。然に吾人は宇宙の一員なるが故に生れ乍らにして、宇宙の本質が具はつてゐる、佛敎では之を佛性と云ふ。吾人に此の働きの完全ならざるは其の自覺の未だ足らざるに依るのである。乍然吾人の本心には常に此の佛性の内在するが故に靜かに自己の本心を願れば吾人の心には永遠の生命と無限の向上とを求めて止まぬ働きの在ることを見出すであらう。永遠の生命とは不死の要求であり、不滅の自覺である。無限の向上とは人格の完成であり價値の生活である。前者は自己と宇宙と一なるを知るに至つて之を得、後者は如來と共に眞に生ることによつて之を獲得する。即ち吾人の生活に於て、此の世の偽惡醜を破つて、如實眞善美聖の生活を現はすにある。

茲に眞の生活とは偽りなきの生活である。自己を偽らず、他を偽らず、如來を中心として自己の本心を裏らぬ生活である。一切に對して至誠を以てし、眞劍と精進を以て萬事に當る生活である。之を自然

現象に眺むれば所謂科學の研究となり、之を人生に眺むれば所謂人生の哲學となる。要を云へば宇宙の眞理に融合するの生活である。

善の生活とは宇宙の大道に合し宇宙の理想を實現するの生活である。人に對しては慈愛を以てし、一切と共に生き活きて限りなき人類の向上に精進するの生活である。即ち人類の自由と平和と博愛の生活である。世の倫理道德の根本標準である。

美の生活とは感情の本心的満足の生活である。即ち一切の醜惡を絶したる眞如法性の涅槃の境地に於ける生活である。所謂佛陀の生活である。世に藝術的生活と云ふは此の美の一面の生活を表現するの言葉である。

然ば聖なる生活とは何であるか、それこそ吾人が常に高調して止まぬ所謂宗教的生活ある。眞善美の根本源泉としての佛の生活を云ふ。云はゞ永遠の生命と無限の向上とに一切を捧げたるの宇宙對我の生活である。更に詳言すれば宇宙の生命に自己の生命の一切を托し、宇宙の靈化を受け乍ら、自己自らも宇宙の理想を此土に實現せんとするの生活である。世に眞と云ひ善と云ひ美と云ふは吾人の智情意に對立して名づけられたる宇宙の眞相について云ふのであるが、獨り聖のみは神に對し佛に對する無限絶對の宗教的崇仰の世界を云ふ。故に聖なる世界は眞善美の根本軌範をなす。換言、宇宙精神の理想境地であつて、吾人から云へば自己本心の靈的清淨の世界である。即ち永遠の生命と無限向上の開くところ、吾人の望みと喜びと力との世界である。

斯くの如く宇宙と人生との關係を眺め來つて、社會と人類との關係を眺め、社會と國家との關係に及ぶとき、吾人は宇宙の理想を實現すべく宇宙の本源より此の土に出現して來たであつて、やがてそれが人類の進歩、社會の發達を意味するものである。從て、所謂社會の經濟も、國家の政治も法律も其の他人事の百般、家族と個人の問題に至るまで此の宇宙の理想を此の土に實現するの表現と見、また改造と

見て常に精進努力の生活にあるべきである。

此の意味に於て經濟の必要も始めて價值づけられ、人類の生存も始めて意義を持つことになり、夫婦も兄弟も親子同朋の發展も同時に此の理想實現の一階程として一層深き統一的向上の一路を示すものとなる。

六

然に茲に吾人の更に反省を要すべきは然は如何にして吾人は最も速くまた最も容易に此の宇宙理想の實現を此の土に實現することができ得るであらうかと云ふことである。

吾人は確に永遠の生命を欲する、乍然凡ての人類が自己と宇宙との一體なるをどうして知ることができ得るであらうか。吾人は永遠の生命を要求し、不滅の自覺を求むることも事實であるが、世間の多くは之を感ずることも多いであらう。また誰か人生の向上を望まない人があり得やう。乍然今日現在の人生はそんなに安樂な世界でなく、ともすれば世は偽惡醜の生活に包まれて眞善美聖の寸毫も見えない生活もあらう。而も此の感は單に吾人の生活ばかりでなく、現在の世相が殆ど此の醜惡の世界とさへ見ゆる傾きもある。夫婦相反し、兄弟相叛き、親子相別れ、朋友相打つの世界さへ演ぜられ、或は不治の病に犯され、或は失業の厄に遇い、或は就職の難に遇ふ、吾人に理想がないではないが、到底求めて得らるべきもない時もある。國と國とは相打ち、人と人とは相争ふ。斯の如きが今日の腐敗し切つた生活である。かゝる時吾人は如何にして、此の苦難を脱すべき、徒に理想の世界のみ語らずして、力なきものゝ生くべき世界もなければならぬ。即ち惱めるものゝ慰めとなり、疲れたる者の休みとなり、力なきものゝ力の源泉となるものがなくてはならぬ。而も之を與へるものば何であらうか。それが即ち念佛の生活である。(一〇三)

A と B との 対話

土 屋 觀 道

A 先月の眞生の表紙面に君が「我に來る者は榮え、我を去る者は亡ぶ」と云ふことを申されてゐるが、あれを讀んだ或る人が、あれは獨りよがりの信仰だと云つてゐましたよ。

B さうでしたか、それはまたお氣の毒なことでした、折角貴重な時間を費してまで讀んで下さつたのに、あの心を充分に汲みとつていたゞけなかつたと云ふことは寧ろ其の人に對して相濟まぬことでした。

A でもその人は仲々の氣焰をあげてそのことを罵言してゐましたよ。

B いや私にはそれが一層その人に對して相濟まぬ氣もちがします。とにかくあの意味が先方に通じなかつたと云ふことは私の書き方が足らぬといふことによるのです。折角讀んで頂いたのに本當の意味を興へずして反つて誤解を興へたと云ふ

ことはどう見ても相濟まぬことです。

A 然し、其の人は初めからあなたに對して氣持ちよく思つていない人のやうでしたよ、だから初めから、あなたの書かれた物に對しては好意を持つていないのです、だから、あなたの説に對して、好い所が見えやうはずはありません。

B 或はさうかも知れませんが、少しも私の書いた意味が讀めないのですから。然し私の書いたものを讀んでくれたと云ふことは有難いことです。とにかく、讀んで頂ければいつかは私の眞意も了解していただくことがありますよ。

A して見ると、初めから其の説に見向きもせない人に比ぶればまだましですね、だから反對しながらも之を讀んでゐる人はまだ厚意を以つた人でせうか。

B まさか好意を持つからしてそれを讀むとば

かりも定まりませぬ。中には好意を持たなくても此の奴どんなことを書いてゐるか知ら、どうせつまらぬとは思ふが一つ其のつまらぬ程度を見てやらう位な所で見える人もないとも限りませぬ。又初めから反對せんが爲めに其の非をのみ發見しやうとして讀む人もあらうし、又初めからいづも反對の氣分でのみそれを讀んでゐる人もあらうることとせう。

A 然ばあの「我に來る者は榮え、我を去る者は亡ぶ」との言葉はどうか云ふ意味に味ふべきでせうか。意味のとりやうでは自分一人が悟りでも開いたやうに氣とつた言葉とも見られませう。又次の言葉にしても「我は天地の大道に立つものである」などと云ふことはやはり、自分を餘りに完全な道に立つてゐるもののやうに思つた書方で、何となく普通の人から見ると一人よがりのやうにも思へるではありませんか。

B いや君の云はれるやうな見方であの文章を見るなら、きつとさう見えるのも無理からぬことです。まして、今日の多くの習慣は自分で得たこ

とも得たと云はずに自分ごときにはとてもまだ得られぬと云い、或は自ら知つたことでも自分如きにはまだ知り得ないと云ふやうに云ふことを以つて如何にも謙遜であるとなし、又自らもそれを以つて反て誇りとするのか普通であり、殊に教でも聖道門と違つて淨土門の方では自らかうした謙遜の形に出るのがよいことのやうになつてゐる傾きです。私から、私のやうなあゝした思ふ存分の云方は決して多くの人々には快く受け入れられないことも無理からぬことです。乍然そこが獨りよがりの私だから云ふのかも知れませぬが、私自身としては決して獨りよがりのつもりで言つたことではありませぬ。やつぱり、今も尚、私は「我に來る者は榮え、我を去る者は亡ぶ」と云ふことは眞に道を信する人々の最も正しい確信の態度であると信じてゐます。

A それはまた何故でせう、其の意味を教へて下さい。さうすれば自然に世の人の誤解もとけることになるでせうから。

B ご尤なことです。かう申せば甚だおこがま

しいことですが、私は今一つの信仰に生きて居ります。そして其の信仰こそは上なき宇宙唯一の真理だと信じています。従つて私は私の生きる道は此の外にまたと無いのだと信じてゐます。そしてそれは如來を中心とした天地の大道そのものなのです。私はいと罪深き愚か者である。乍然之と同時に此の道によつていと高き人生の理想を實現し得る一人であることを確く信じて疑はぬ一人であります。此の意味に於て此の道を離れて私の生命なく私の向上はないのであります。而もかうした私の信仰を罵り、私の活動を妨げる人のあつた時、私の心は之に對してどういふ風に働くこととでありませう。而も初めには私を信じ、私の信仰を尊重した人々が、私への意志の疎通から、而もそれが最も下劣な非人格的な名利や我慾や迷執のもつれによつて、私を捨て、私と同じ信仰をも離れて再び從來の邪慾邪見の慾界に墮落して行くのみならず、私を裏切り私の信仰を批難して遠く如來の大道までも離れ行く人々に於て、私の偽らぬ赤裸の心はかうした場合、自ら

立てる道の正しと思ふ限り、私はどうしても「我に來る者は榮え、我を去る者は亡ぶ」といふより外に何の言葉もないのであります。而てかく考へることが直に私の道に生きつゝある證據でありまた、直に道を促りうる力であります。かゝる場合若し私が此の信念に住することができない位ならば私の信仰はその時己に亡びることとありませう。

A して見るとあゝしたあなたの言葉は全く一人よがりの言葉ではありませんね。

B 否、それどころか。むしろ、それこそ私の生命であり力であり、更に無限の價値であります。私に此の自覺、この言葉なくしてどこに眞實の信仰があり得ませう。私は天地唯一の眞の宗教に自らを立ててゐると信じてゐる一人であります。宇宙に二つの眞理があらうとは思へません。従て宗教の眞理も一であります。世に多くの宗教があるやうに見えますがそれば宇宙唯一の此の原理が其の民族の發達の程度に應じて應分に現はれてゐるのに過ぎぬのであつて、宗教そのものの本質が幾

つもあるのではないと信じます。故に今私の信ずる信仰が此の意味に於て宇宙唯一の眞理に安住してゐる限り、私は此の道にあつて、永久に榮え、永劫に亡ぶることなきものと思ふのであります。茲に我に來る者とは我と共に此の道に來る者との意味であります。然ば私が我に來る者は榮ゆと云ふことはまた決して誤まつた考へではありますまい。私を去る者とは即ち私の行くべきこの道を去るものとの意味です。何となれば私の理想は道の外に私がないからです。従つて私を去るものは又私と共に斯の道をも去るものです。道を去るとは即ち天地の大道を去るのです。従て之が此の世に榮わるわけはありません。故に「我を去る者は亡ぶ」といふのが私の當然の信念であらねばなりません。凡そ自ら道を信ずるもの、誰が此の信念なくして眞に道を説きうるものがありませう。従て若し此の信念の無きものは未だその人に眞の信仰がないからといふことにもなりません。

A して見るとあのあなたの言葉を解し得ない人は未だ眞實の信仰が無いからだといふ事になり

ますね。

B つまりはさういふ事にもなりません。だから私はかうした人の批評を聞いて、寧ろあはれに感じ其の人のために一刻も早く眞實の大道に目醒めて頂きたいと祈らぬ日とはありません。

釋尊だつてさうではありませんか、自分を自ら我は佛陀であるぞ、覺者であるぞ、我こそは天地の大道に生ける者であると言はれてゐるでせう。キリストだつてさうでせう、我を見る者は神を見るものであるといひ、彼に反抗する者に對してはサタンよ退ぞけと罵つてゐます。之皆自ら醒めたるもの、道に立てる者としての當然の自覺であります。従つて是等の偉人は悉く「我に來る者は榮え、我を去る者は亡ぶ」との深き信仰の人であつたのです。

A でも夫等は全く私共とは、違つた偉人の言行ではありませんか。

B 然し、私共は偉人でなくても、之等の言葉を吾人の手本とすることはできませう。若し之をとるべきでなくして、全々捨つべきものであるな

らば私共は何も偉人の言行に學ぶ所はない事になります。偉人の偉人とすべきは私共の心から眞に求めながらも仲々によくなし得ないことを彼等がよくやつたといふと共に又以て私共の眞の手本となし得べきところにあるのではありませんか。殊にそれが宗教的偉人の言行に於て然りでありませぬ。

此の外、自らを罪惡深重にして死生出離の縁なしとまで自ら歎かれた善導、法然、親鸞の如き聖者も自らの信ずる宗教の信念に於て正しく之を眞生の道、如來大悲の救いの光と仰がれた點に於て、自分は正しく其の道により、其の道に生ける者とのいと深き確信のあらせたことは寸毫も疑ふ餘地が無いのであります。而てかゝる人々が眞に自ら此の信念に住し、此の道に生るとき、「我と共に此の道に來る者は榮え、此の道を去るは亡ぶ」といふ感じがはたしてなかつたか。私には疑いなき能はずであります。それは何故であります。現にかくいふ私がさうした信仰に生きてゐるからであります。(九月二十九日)

◎十月中旅行先日程觀道

- 六日 夜 東京發
- 七日 日 晝 大阪大軌鐵道會社員へ講演。夜 大阪市民館講演
- 八日 日 晝 大阪天王寺區眞松院。夜 大軌鐵道會社
- 九日 日 大阪發
- 十日より十六日まで、河内大佛前得生寺三昧會
- 十七日 大阪神戸の道反と松茸狩り
- 十九日 晝 神戸。夜 京都嵯峨青年會
- 二十日 晝 名古屋崇徳寺。夜 梅香院
- 二十一日 晝 崇徳寺念佛會。夜 座談會
- 二十二日 夜 靜岡縣燒津光眞寺 座談會
- 二十三日 靜岡縣清水市寶相寺 座談會
- 二十四日 歸京
- 二十五日 終日 學寮念佛會
- 二十六日 夜 東京三ノ輪淨閑寺座談會
- 二十七日 夜 東京慶應大學内座談會

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
 振替口座東京四七二八八番 眞生社
 東京市芝區芝公園第十四號地九番
 編輯兼 發行所 土屋觀道
 東京市芝區三田四國町二番地三號
 印刷所 三井清次
 東京市芝區三田四國町二番地三號
 印刷所 精進堂印刷所
 東京芝區芝公園第十四號地九番
 發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日) 大正十五年十月十一日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 五卷第八號
 (第三種郵便物認可) 大正十五年十月十二日發行